

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

かわってくる時は思ってもいませんでした。というのも、私は今、いくつかの大企業の収蔵品の状態調査、修復の仕事をしているのですが、テロ勃発数日後にそうした企業の仕事場に行き、コンピューターの前に座ったとたん、そばの多くの人のコンピューターの画面に「3W」の文字が。そう、それはThird War、サイバーテロの画面だったんです。

それからその日は一日中大変な騒ぎ。こういうことは私の仕事には直接関係は無いのですが、あの黄色い画面は私をしばらくショックな気分にさせました。そして今、ちょっと気がかりなのがこの間一緒に飲んでた部長の言葉。「ねえ、加賀先生、実はうちのニューヨークのビルってあのワールドトレードセンターの近くだったの。それで、事件の後、壁にいっぱいかかってた名画がどうなったか、支社に電話して聞いてみたのね、そうしたら怒鳴られちゃった、こっちはそれどころじゃない、人の命がかかってるんだ！って。」

……まったく、ほんとうに、それはそれでしょね。もちろんです……うね。もちろんです……「でもね、情報によると、ガラスが吹っ飛んで、

部屋の中が真っ白だって言うんだ。と、言うことは、もちろん壁の絵もやばいですよね。」

……まったく、ほんとうに、それはそれでしょね。もちろんです……うね。もちろんです……「でもね、情報によると、ガラスが吹っ飛んで、

なされたことかと一瞬力が抜けてしまう感に襲われます。

毎日どんなに一生懸命後世に残そうとして美術品の保全に心を砕いても、こんな悪魔のようなテロや戦争はすべてをうち砕いてしまう。そして人の命までも、何もかも。それでも、負けてはいけないうな小々な小々な努力。しかしこれが束になった時、大きなものも動かせるのだから。

と、言うことで、今日もワタクシ、小さい努力

をやってまいりましたあ！

今日は、楽しいことに、掛け軸や、日本画ばかりの調査だったんです。私は基本は油絵の修復家ですが、ほんのちよつとした染み程度は日本画も直します。もちろん、表装の解体や難しいことは専門の方にお願ひしていますけれど。こうした日本画の修復を勉強し始めるきっかけになったのは、日本帰国後すぐに私のうわさを聞きつけて画商さんが持ってこられたひとつの日本画の修復の仕事でした。持ち込んだ画商さんは、そのころはまだ私が油絵しかやらないとはご存知では無かったのです。目の前に広げられた作品を見て、私は言葉に詰まってしまいました。

それは、江戸時代に描かれたかなり激しい内容の春画だったんです。「あらまあー。」と言ったきり、はじめて見るもので、びっくり仰天の私。とにかく私は油絵しか出来ません、って言わなくっちゃ。でも、画商さんは、ダイジョウブですよ、だって、ここと、ここの一（と、かすれた人毛の部分）を指差す！と、かく、毛のかすれたところに点をいくつか差すだけです！と叫んだと思うと、とつと帰っちゃった。思うに、たった二人でそんなとこばかりじっくり至近距離で見るわけには行かなかつたらうな。

困ったな。しょうがないな。では、とつくり勉強してからこれだけはやってみようか。

一生懸命練習したり、専門書で調べたりして、作品を前に部屋で数ヶ月間の奮闘。面白かったのは、一緒に住んでいた両親の反応でした。母も父も、ある日恐る恐る私に聞きました。「ねえ、おまえ、これからいつもあんなもの部屋に置いてくのかい？」まさか、そんなことないよ、心配しないで、これつきりだからね。

しかし、私は知っている。それでも父の目がなんだかうレシそうだった事。（ん？気のせいかな？）今のは余談でしたが、そういうことで、日本画の扱い方をぜひ勉強しました。

掛け軸は、ちよつと前まではどこの家にも床の間があつて、鯉だとか鴨だとかの絵が描かれたものがよく掛かつていたと思います。（そう言えば、うちにもありました、新築祝いにもらったすっごく安そうなやつ。）ですから、掛け軸を触った経験のある人はかなり多いと思います。ですが案外、きちんとした扱いを知らないようです。こういう企業でも、係りの方が恭しく壁にかけたりしまつたりするのを見てると、そうそう、そこでそうとつと、よしよし、あ、あきません、そんなとこでガシッと掴んじゃあ！と、思わず呟いちゃうやり方をしている。

掛軸は、折れが大敵。折れが入ると、そこから絵具が剥落したり、絹や紙が切れたりしてきます。ですから、真中をぐしゃっと掴んでしまつてはいけません。でも箱に入れるとき、ついつい窮屈で押し込めてしまつたりするみたい。ひどい人になると、紐を真中でぎゅううなんて縛る人がいる！だめですよ、これもちゃんと画面を傷めない結び方があつて、箱も入れる方向があるので

箱の中をよよく見ると、軸を乗せる台が片方に少し寄っています。これは、軸と結んだ紐の結びが絵を圧迫しない様、上に向けて広い方に収まるように作つてあるのです。時折、この軸がものすごく細くつて、しかも取める箱がそれでも窮屈なのがあたりります。そうすると当然、きちきちに巻かないといけなかつたりします。こうしてきつく巻いていると、どうしても巻き痕、折れ皺が出来るしまつ。ですから、軸装をやり直さなければならぬ時にはもう少し太い軸に変えるように勧めます。ただし、箱は大事に持つておくこと。このオリジナルの箱が何より大切だったりするからです。箱が無いばかりに、掛け軸の評価、値段がぐんと下がつたりしてしまいます。

今日仕事をした企業では、この大切な箱に直接ベタベタとシールやセロテープを貼つてしまつていました。これらテープは黄ばんでしまつて、木

地に染み込み、どうしても痕が残つて取れません。箱が割れたり、壊れても、むやみにセメダインや両面テープでいい加減に止めたりしないように。本当は膠で接着するといいんですけど、信頼出来るきちんとした職人さんに依頼すべきでしょう。こうした多くの人の小さな注意の積み重ねが、結果的には永きに渡り美術品の命を守ります。

私は、油絵のメチエに惚れ込んで修復をやつていますが、しかし油絵の修復家だからこそ、むしろ日本画、紙の修復知識を学ぶことが重要なんだと思つています。紙や、膠の扱いを知り抜く事が、修復の原点だと思えるからです。では、次回も、引き続き日本画のことをお話しなく思います。

（つづく）



作者に「箱」とも考えられる「箱書」は、この作品の重要な美術品である。

かがゆき●絵画修復家、大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は講座で修復工房を主宰。